

with コロナ時代の環境研究の意義

武田 淳（静岡文化芸術大学文化政策学部）

はじめに、新型コロナウイルス拡大の中、最前線で治療・感染防止・日常生活を支えてくださっている全てのエッセンシャルワーカーの皆さま、会員の皆さまに感謝申し上げます。

新型コロナウイルスの影響は、学会運営にも及んでおり、本学会においては6月に予定されていた研究発表会が中止となった。今後は、「with コロナ」を念頭におき、オンラインでの学会開催も視野に準備を進めている。

社会のあらゆる場面でオンライン化が急速に進んだのが今年の特徴であるが、実は、このような社会はコロナ以前から我が国が目指してきた姿でもあった。例えば、内閣府が進める科学技術・イノベーションに関する政策「ムーンショット目標」では、AIやICT技術を駆使することで「2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現」することをひとつの目標に定めている。今や日常となったリモートワークは、「人が身体や空間から解放された社会」の例ともいえる。すなわち、くしくも新型コロナウイルスの影響を受け、このような社会の実現が今後加速的に進んでいくことが予想される。

オンラインに基づく生活様式は、便利さもある一方、課題も見えてきたように思う。そのひとつが人と人の「つながり」である。例えば、筆者が勤務する大学では、今年度の新入生は、初対面の同級生とオンライン上で人間関係を構築しなければならなかった。そのため、「名前は知っているが友達と呼べる人はできていない」という新入生たちの声をよく耳する。「つながっているのに孤独」な状態がキャンパス内に広がっている。

リスク社会論を展開したウルリッヒ・ベックは、『再帰的近代化』の中で、近代社会（科学技術と経済が国民国家の枠組みの中で増幅する社会）では、「個人化」が進むと説いた。地域に暮

らす人同士が頼り合わなければ成り立たなかったかつての生活は、科学技術によって個人の独立を可能にした（それゆえに個人が背負うリスクが増大した）。ベックの議論を踏まえれば、個人をコミュニティから引きはがしていくプロセスが近代だったといえる。先述のような未来社会を念頭に置くと、技術の進歩が人を孤独にする（人と人のつながりを薄くする）現象は、今後も進んでいくかもしれない。

「つながり」が薄れていくのは、人と自然の「つながり」についてもいえるかもしれない。私は、パプアニューギニアの熱帯雨林の中で暮らす狩猟民族と、生活を共にしながら調査を行ってきた。そこでは、単に人と人の「つながり」だけでなく、人と自然の「つながり」の中で生活世界が展開されている。例えば、子どもが狩を覚える際には、五感を通じて命を殺生する術を学ぶ。情報だけのやりとりであれば、オンラインで可能かもしれない。しかし、どうしても再現できないのは、五感を使ったコミュニケーションであると感じる。そのような意味で、対面でのコミュニケーションが制限された今の状況は、フィールドワークを基本とする研究に従事する私にとってもどかしくもある。

本学会誌に掲載されてきた論文の数々は、総じていえば、どのように自然環境を守るべきなのか「自然の守り方」の多様性をそれぞれの立場から示したものであるといえる。換言すれば人と自然の「つながり」、ひいては自然を守ろうとする人と人の「つながり」に関わる研究といえるかもしれない。社会が劇的に変わっていく今だからこそ、研究の意義が改めて問われている。環境研究に携わってきた私たちにできることのひとつは、このような「つながり」の創出であるかもしれない。